

## 日本語教育プログラム可視化テンプレート開発

－プログラム構成要素と記述枠組みの検討－

札幌寛子（金沢工業大学）・松下達彦（東京大学）・大河原尚（大東文化大学）  
遠藤藍子（昭和女子大学）・小池亜子（国士舘大学）・菅谷有子（東京大学）  
鈴木秀明（目白大学）・田中和美（国際基督教大学）  
徳永あかね（神田外語大学）・ボイクマン総子（東京大学）

### 1. はじめに

筆者らは、十年来、言語教育プログラムの運営方法や評価について文献講読などを行い日本語教育プログラムのあり方について議論してきた結果、日本語教育界全体でプログラムレベルでの議論ができる仕組みの構築が必要だと考えるに至った。

このような仕組みが有用だと考える理由の一つは、従来の日本語教員養成カリキュラムで、コースデザインについては学ぶが、コースレベルを超えたプログラム全体の使命やカリキュラム構成を理解した上での授業運営について学ぶ機会はあまりないからである。本来日本語教師は、所属プログラムに課された使命を認識し、自らの担当授業のカリキュラム上での位置づけと達成すべき目標を把握した上で授業にあたるべきであろう。だが実際には、どのように授業を行うかに腐心するあまり、担当授業しか見えていないことも多い。もう一つの理由は、日本語学や言語学、教授法などを本来の専門とする教師にも、プログラムマネジメントの知識や経験が必要だからである。実際の現場では、ある程度経験を積んだ教師が、主任などの立場でマネジメントを任されることが多い。このようなプログラム運営責任者にとって、教務面でも人事管理面でも、組織内外の関係者と現場の問題を共有し解決できれば、より効率的かつ効果的に業務を遂行できるであろう。

そこで筆者らは、日本語教師が自身の関わるプログラムの使命や担当授業の位置づけを理解できるように、またプログラム運営責任者が、業務上（例：カリキュラム編成、外部との連携の取り方）での問題を見出し改善できるように、プログラムの全体像や現状を可視化するためのツール開発が有用だとの思いに至った。それで、このような目的のためにプログラム像を描くのに必要なプログラム構成要素とは何か、それらをどのような枠組みで記述すればよいかについて検討し、試作版のテンプレート（ひな形）作成に取り組んだ。

### 2. プログラム構成要素の抽出

プログラムの構成要素とそれらの記述枠組みの検討のために、欧米の言語教育プログラムマネジメント論や経営学、プログラム評価学（特にロジックモデル論など）などの知見も参考に、メンバー各自が必要だと思う構成要素案やその構成イメージ案を提案し、それらをもとに議論を重ねた。そして、主にプログラムを存立させる「所与」の要素の〈サービス（使命・活動内容・カリキュラム構成など）〉、〈資源（ヒト・モノ・カネ・時間など）〉、〈制限/条件〉から成るプログラムの静的構成要素（次頁図1参照）と、プログラム活動を「駆動」させる要素〈プログラムセオリー〉、〈実施/運営計画〉、〈現状・成果〉から成る動的構成要素（同図2）を抽出した。合わせて、それらの要素の関連をどのような枠組みで表現できるかを検討した。

### 3. プログラム可視化テンプレートの構成

テンプレート作成には、シート間での項目の相互関連を「リンク」機能で表現できる表計算ソフト Excel を利用した。現状では二十数枚のシートから成り、上層部シートには、先に抽出したそれぞれの構成要素の関連枠組み全体を俯瞰するための概観図が配置されている（図1および2）。そして概観図の各枠組み部分をクリックすると、関連する具体的な情報を記載するためのチェックリストや質問リストから成るシートに進める構造になっている（図3）。

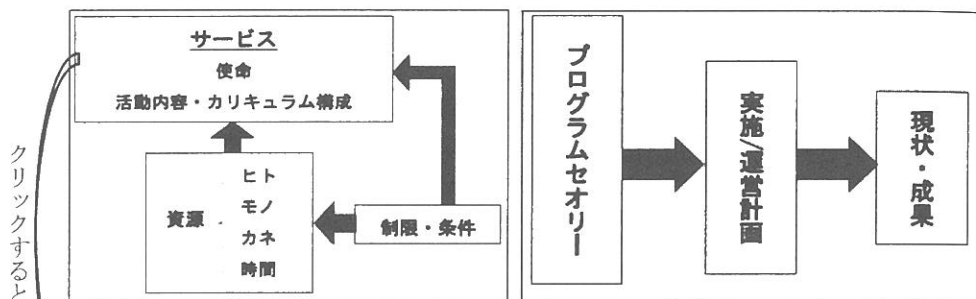


図1 静的構成要素

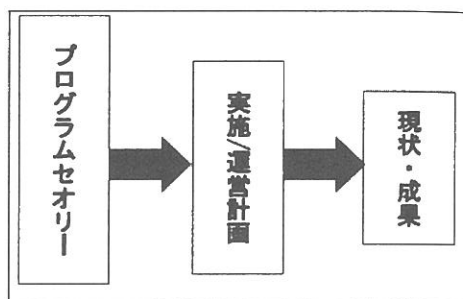


図2 動的構成要素

クリックすると

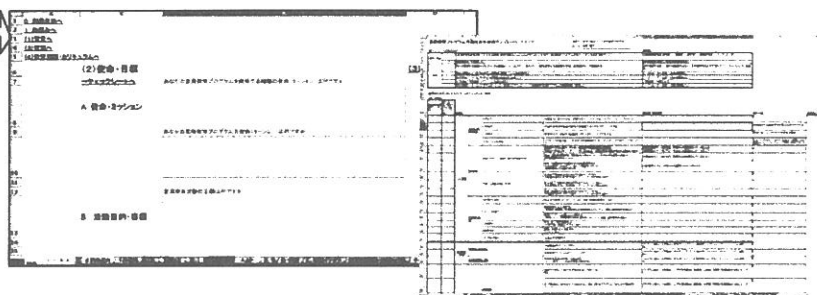


図3 下層部のチェックリストや質問リスト

### 4. むすび

筆者らは、将来的にこのテンプレートを教師養成講座や教員研修、地域日本語コーディネーター研修などで利用できるとよいと考えている。所属プログラムがどのようなものかを認識したり、現状の問題を見極めて解決策を考えたりするために、特に組織構成や資源配分が明確ではない地域での日本語活動などの関係者に有用であろうと推測する。

また筆者ら自身にとっても、あるプログラムの全体像や現状を可視化するために、何をどのように記述すべきかという今回の問いかけは、正に日本語教育プログラムとは何か、教育的観点のみならず、社会的文脈をも踏まえてその本質を問うことだと再認識できた。

### 付記

本研究は、平成27～29年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「日本語教育プログラム論構築のための基礎研究」（課題番号15K12901 研究代表者：札野寛子）の助成を受けて行われた。

### 参考文献

- White, R., et al. (2008) *From Teacher to Manager*. Cambridge U.P.  
 安田節之 (2011)『プログラム評価』新曜社